雲井なるそらのかすみ春かぜにいちはやくさくはなのいろ

とりかへ屋ぬしのをとこのもとへ

ところ代をくらはしてこまをとりかへるやどちの

中ねかこの物のかりしろ　祢宜ひろふ

ゆくゑにいとゞ昔ぬしをこそ宮ぬの祢宜の祢宜そ帰ぬる

おもやけのかりこまをとりかへてとをくの人をく

よよへいとまをかりあるこまのゆくゑ

人のもとへ

姉かをとぬ時流の忘れ草ふるさとをあけくれ

忘れたる人のさまへるうこんとひてをとも

たのえつくこぬ俗代をかりるうれまとに入しへ人さく

すゑのそたてをれよ　みれいたるうあり

そるて月代をへてうたけたるとうふくて

めつらしやつきふ月をそやとりぬ　雲井にちるくそ

おみなへしをこそ　人のもとへ

忘ひのおみなへしひて後さくふかくそ

こるまをこそをいふきをみるんを

おもわんしの

反歌ひくすとけむひかく海をてうとい物のさらおん

さきだつの袖よりまさるあひをみるこころ
はめいろいおくてあるてらおるこころいみく
ゆくすゑまくしらぬ朝ゆふみちとかたこの今
ゆくすゑまくしてあるこころ
のみちのくおもへしいかるよせて袖
ちるふるよちるさいふつうしんこのふれ星のみてこの紅
こひ侍よ遠ひいてとこひをうさ紅ぬるふ
いくよしあるとこふるこころ
そのみおもひけぬてあるそよ人ようる色のもと
さくしんようあるさきとふれあるこころしいく

袖ぬけぬるふちくあるこころひさるかりそれ
よやこころう月れ十日ありるふ月れ光を
ゆのくよそそこさるみしあてしてしてし

すゑたるあり　しかつゝてまとゝしく
やまとうしゝとよれ　花のみさきまいすゝてあら
しものみ品ひしゝふ　花はよゝてすきを　ひ
のわりなるゝをゝ　やゝとよくさゝにろさて
そのすゝろの　えうゝあ
らゝひしゝある風　情よりたゝれ　燈うちるひさん
ゝ
返し
消ぬゝき　燈　ふゝ風にふひさるせひてたゝよふ　ゐと
まゝ　ゝなゝをゝ　ゝをゝひて
ゝのみふゝかゝゝき　袖をゝさゝて　袖の　をゝいゝるゝん

返し
人ゝ　ゝ　ゝゝ　ゝ　ゝ　

ぬしはよくはこまるくしてあとさくしころあれぬる
枕ゆゑのみをとひさよせてうさつくる
たまうの香にゆひうつるとするあよかゆゑ枕ゆゑ
ゆゑてはこはけうるるとやうてあるより
ゆゑ神ゆゑあまるうはうを枕よのみや袋をくさ
れかのよしこまて郎女をさたりしふひとり
神さ先よまこうふらぬこるにてすさをその
はと先てゆくのあるををるれついてよ
ゆゑはとかくひ嗜よかくさりける時るう郎
るよとまてゆゆひいてつるをみとはしを

ゆゑひ出て神先一郎女をゆゑ行てはけくる郎女ゆ
又ゆゑはをとせてうのこゆとるくををるゆ
ゆゑとやんいくゆゑみさまてたくみそ物を
一枝はくみてやりたりふえこそゆえ神とそ
首ゆふ白ひうゆゑそを車にまきこひの多ゆふあるぬよ
るる
使つくふかさ物神のうはうゆふゆひよそんて物物
たこえまえくくて出ゆひ出るにたくやあるまと
るくゆひうとゆよくて行うるくゆ車ち

ゆくとこそよふかはるかとやしらと
仏地ふと見つ
をくるといふなつさはまさるぶかりてすくつる
菊ゆいけもくみえんとかはやふかあしを
あやうくこそとやたる匠のに
遠ひくるんはかとふとうえ稚ほんを菊にゆひあそせよ
見て
けふもはんのかやみえつんを菊をつくさくつる
人の女とうくんは六月すきてと笑くるとを
いまてを思ていりはそうとさくくんのをとく

人のようそう
みる月をまてとたのめ一日の菊とむすひあぬと笑ふ涙の
せんかきをあとをはふてろいてうからをはらか
と思くとひかきてんくくて
忘ひつくんを忘れる意代山をあさ山をけうう身れ
川のをう弦のあをかはの雪えるるいて世の
中をもくとあらあくをかをえて
まよひへ意路を中きはるすめるかる法の孝を
ちくはをれりとふ無聖人来ることを笑ひを
ゆうてを山はをとをくを

且するといきくとも、のこ三笠の浦の濱四根のさ初ん
と点ぶいとく（且とく）ぶ（ぶ）せるまんこすり
こりてハやうてをとつ遠ものとあとおりえて
たきの波の重ねをハせ初をいちゐる神代ふよるん
をふむりひとるかこハときもまとるこくく
社のやうまて市もあきこうふみえぬるふく
さむうさふ
おうむ（さ市もさてうふみえぬすて志けきあけさる雲うう
赤い長ゐる代山のうへ（こうやまてるふ志て
うしく人とくせ山のこ孫とハのこ

ゆるを初ゐふおうあいこせいゆてきこ
て山すみえ波雲の初りひこるふいこのの
うふ
詠めうるそる代山の横さ（たこるすきハうきくるん
雲代ゆ（ふうけたふ遠）その後ル形とこく青伝
人をるたの むこ（いふ（ふ遠とけんうふむさ
あふみとりやすてするふあるく（あちさふき
ここのこまされハあ（ぬよれふちーてんこんと
ゆ（ま加るふゆうくこるとうきてふむる
いうるん世まてルたゆまるこよ（さ（ひ

とるとての紫式部のさはけ
おもしてとたのめかとも為はさたえぬ(さ)ゐ紫式部さ
高にさそふ人のつ神よひうちんのけうを
その人きこのよ為いいらおといひさる屋るすの
はいてる
雲はれをまてにあ(ふ)ふきまよ欲ふ風のまはさえん
治部かとのころあ(り)しまやとよ紫あ(り)れ
ころ上西門院女房ものはに車二はかりすて
まうる道さう(ー)さう(ー)しみえ(ー)おかに小家お
殿といひし人の紀ひさいのかりまてこふ

先さまう(ー)をこ(ー)て為ものかけていひる人の
通盛 みちもりはあそんなもまてあけくとさ(ー)
けよ和りふをことをりとおわえ(ー)かそ人のゆえ
はけてそけよ元かけて先んそあ(ー)山はみちを人よ和(ー)まて
屋(ー)
仏のけ(ー)人のおるるまち紫をんうはて思ひそ先ん
おとや(ー)和りはたく為ことてとそ思ひ(ー)を
それ人をそ紫式部とまてなりよ(ー)あまま式
ためかさそよてあけさて人日和(ー)まよ(ー)
さはあ(ー)さ(ー)まう(ー)ため(ー)なりる

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

紫のうすくこきもとりまぜたるなどいとをかしう
咲たるをいとうるはしくうつくしきにそへてんのうちも
いかにとあくるものこうかくてかうめころ秋はも
やうりの花はいとこまやかにしぬたんの
うすくなけうまれたりあひたるみるものこ
あさましくなる
つくづくとかうめすくれて果合はいとうるはしう
西山なる雲のすみしてはるかなるおとこの
うけきゆかいとまかさにつけてやえくく
をとろまてうるはしうもあはれとも

思ひもぬをいくうそとたからそへぬかの花はなをもせうかの
この花八十日あまりうかるをみえしはりて
りてー枝をすこしにさしていてすりそ
ゑるかつくしあるを思ふるのうまさりるよれ紫
まへなるうきをうるよくひうこそうちか
ゆくー
山里ハ秋ハ悲しき萩すゝ小菊の原に秋のきりかせ
月の秋迷いの品ハ品ハ小ハ
侍をんふこあてかうむ迷ハ悪てハすする月の形
冬よりかりて枯枝の初雪はすこなく

すきてぬる色はすきまき小春よりさきてふ
まつさめくみたるとろ紫のろくしやう色なるか
ときしらみえてるふかの秋ふひをさきさうう
素さゆる松村の萩はなの色秋はなるをそれにたのふや
あふとなく松やのさむしるうちもとひつ品ふ
ことのこあはハ

夕きりあ山まてこ面新な枕はちをうちもとひて
あくるとんハなとひめんみ村さのこそゆるかるあさ
あよさふしまさよりはは中納言のむすめそち
ものといひのあひおりくまくからぬ

雅頼

さまてあるのとしもやうの秋のころ
山里よるゆあむるとこゆ久くこりあるる道
たりしかこのみるそよやはたそ人
まさふく松やは板まをりる月を素をやはふ秋の夕星
えんはとしくりのふひやる庶は松をあくまきくや秋は山里
ひとしくあやをさそふきくしあるるころは秋の山さと
うしやまりかきうこていう斗みゆるすむ秋は夕星
根ひろふ松とはやはしあんあ雪さちこむる秋のやまさと
ケりしるみありかるんとふすのいてやゆうや秋の山里
ムさあるいハさこあて我ゆよあるんねをあさはゆまさと

こはたのかうし梅なりまの山里の秋の山里
うたゝねのとこ夏なるこゝろ引をしてうつまくきの秋はや里
ゆりさてをみるはかりかてんゆゝかりける梅の山さと
ちりもたゝぬ色ことはやうなりしとをんへゝわるれぬ
あるこゝろのふ雪のきくれはやあく
しくはさたる花とおるてゆるゝ人のつの
さそこにふけくことをあるこゝろしうひとを雪をゝ
雪のうへはは梅のまるる梅みをうは雪たのりをゝ
とやこるをるをるゝ
花といへはうはたるふあるとをゝ雪のうへうえし

よゝふをちてちりゝみ人のとりをきかうよさ
やうありしふをうあゝ人のこのみあゝしは
山ゆかはれへるやそこのあ人すてこに祓をみし
人のこゝのひてゝたりもてゝうをみふをあるゝ
あゝとをみゝうこと世なるひをて女うこふのの
おゝくけるゝしをまをあゝ祓とんこゝ
うのちとゝうきこゝせよりゝて男祓をんん
よゝをゝちをうを花のみをへをつきめせいふうん
立へるをうこゝをとゝいきゝ祓ゝ枕をいふ雪をまゝん
おをさゝゝ人のをこゝやをゝ明新ゝゝ花雪

ちとあいなのちうらのうゆうれてとるさ
あさ月よいと紫を　あさをとそ
秋思人の心を秋はりあるよとさまし　元あけくらん
枕ゑ人ゑ心ひとひけておこうやあのとそこひえん
あけくさ月を袖ゑ涙ゑ　ゆくうへされ神ゑ月を　あけさ
あのまうのわしせ給ひとりして　ゆるくく
ねくうせしるゑ火消ぬまとをひいの
うつみ火はかりかさねてあしゑ　ゑ
とちゆ人ゑうさまし　ゑのうちゑかとふ
のこさゑあとゑひしうとゑ　ふせふ

ことはまゑゑゑいひやゑ　ゑ秋ゑ
つゑゑゑおゑゑ　ゑ
ふとちゆくれ煙火かさおうゑ　ゑ
誰をそれゑの夜ハ数ゑゑひして　ゑ
あとゑひつくるゑとふ　ゑれすけの　重衡　ゑ
あにちゑひゑるとて　ゑ
まとしきとゑさまし　ゑ
秋を人ゑおのめゑ　ゑ
ゑうきゑうとゑをとされしうハ
あめやうふゑあせゑ

のちまといひしうとめをくらてもつ
てゝ衣をゝもさうゝむとてさうゝとて神てのち
心よりひしまる

あることにてこの人の物語をもこゝろまとひぬるゝ事
発をけなうもぬこゝろ物をもいつて物をもぬる
この人心よりあてをひてくるのゆうをふ
うゝ心ひとゝかりたゝ物をもいつて神
いとまもなしゝハ
ぬまをもなし神こゝろあるを物のれしの事をハさ給ふてく
とゝ心ひしをたうこゝろかうんとしてかうんとして

いつまでもうゆうまうこゝろにあんとらもてしうゝ
是まもしの様さうなぬ世ありせいこのみやせます者一こと
いへハ物れしこゝをれこゝ色心ひてあくく
とう心よりあをまもこゝ神ハ物をふうかひ
ありけまハ
こゝろこゝ成こゝこゝふ心はとけてこゝ
あることおこさるをまもこゝ心ひ物ぬ
物をしひこゝしをしてくいて
まもし後よ物のハあたるゝくて
かゝとおこさこゝ成こゝにみこゝ心ひ物ぬ

毎年一人のさまうてうせすることに公さ
ぬ人ゝ多いひをきゝをせまて五月の
はめなくなり中旬ハよろ〻ふはかり
なくてあうくとしく小四十九日なるあり
てきゝまてり一さぬ後あとをりいてい
ゝり僧よとゝせ国のせう上人よたてまつる
なくせうよさぬの志をまてをさまてり
ありよりかつておりけいとすむ出さた
さまの道なる義は彼のありまてたたそれをみる公地て
ゝひあ一ゝかあきゆたゝやまさりて

義てゝ人ゝ多世にのこり居ていふるなる義なるゝん
言金院うくまさせ給ぬときゝろみなまゝせて
よのるすゝえてをよぬはとかかさ
まなくなるゝなるをけふすゑの世よ
あまりゝるはてやあと人のやまる
雲のこゝ形未とをくみ月は公りぬと笑て出さ
中高のはゝのうちをはかりまゝするいう
はかりとうゝ
かけなくゝる日は光うくまつひとりや月はさてけん

国立国会図書館　タイトル『群書類從』 請求記号 127-1

ガラス使用

群書類從卷第二百八十上

群書類從

二百八十下

東京圖書館
和書門
叢書類
二四函
五架
七號
六六六冊

127
666
1

354

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

国立国会図書館　ダイトル『群書類従』請求記号 127-1
ガラス使用

明治文庫蔵書印

群書類從卷第二百八十下

和歌部百三十五 家集五十三

明治八年文部省交付

後鳥羽院御集

TOKIO LIBRARY. FOUNDED BY MEIJI BUNKO

建久元年十月十日

千載集

秋歌

秋のよのつきかげ

ながめてもあかぬ

ものとおもふ

ものをいかに

なにとて

あかしかねつる

秋のよのつきかげ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

ことをそなへまゐらせたるものさてまゐらせ
の給ていとゝ志ゐるゝ人るゝ〳〵ゝはたゝいとん
かゝれきゝ義とのゝこゝちくとゝくとゝくを
みさゝ人こゝるまよくまて大ゝさ世さゝゝて
ゝゝわゝそきゝゆゝにきこえたゝゝゝるゝこゝ義人
れよゝあゝまゝにむれひゝるゝゝゝゝゝあゝゝ
ありゝ人をあゝゝるゝゝゝれゝゝゝゝる
ありてゝゝゝゝゝまゝゝゝゝゝけゝゝゝのひを
ゝゝてをのゝゝゝゝゝたゝゝひてゝあゝひ
ゝゝゝゝゝ

うきてうゑをよみすてんよさてるいうるへし
ゑゐ身あるゝゝ和ゑえ袖ハあるゝゆゑおりひ拾て
人のもとへはてゝあるといひてみゆるゆゑゝ
ひいこの浦ゝゆゑせゝとゝひとりゝてるをゝを
さうゝてさえぬあるゝあるそゝ海ハ
さいまゝゝ身をうゝてるゝゝとゝひゝぬるを
和ゑゐすゑハゝとゝゑゝよあるぬゝさゝんいて
ゝちおきといひゝものけゝさるゝてゝゝて、
しゝゑあるゝとうゝゝゑゝたゝ海のゐゝハゝて
の紫ゑあるゝしをつゝるゝ秋ゝゝめゝて

美ゝゝちのゆゑをさてゝしゑ地あゐのたゝん
さんゝゑあるかさゝこのゑをゝひおりてぬ
人ハあゝゑゝてゆいみるゝゝをゝゝゝのゝゝ
ハたゑゝあゝんとおゐえゝゝハゝるいゝゑす
つゝゝゝとゝひつけてゑ和ゝもあまゑを
佛ゝむゝひゝてまゝりてあさゝんゝゝゝの
ゝゝあゝしゝゝゝけゝゝゝハかきりあるゝゝゝふ
あゝゝちまゝふるゆゝたゝるゝ身をゝゝゆゝふ
ゝゝのゝすゝてゑゝゝゝゝゝゝを出あゝハゝえゝせぬ
ゝゝゝさてあゝるゝゝて

まことためしとひさしぬきるをみそらに毎あるみそうと
いえんとおさ心地すて秋ゆく末ものきふ
すてしてをつさ心ちせん月はうき歌
京はゆ〻おきれてすまる風のをとこちふ
うかをかゆめつゝ物思ふあさひの光
いらるる心地ふんちのかさくさる
いひてをいるるをとひつこよひ賀に祝ふるん
歌のあけ日はるをみさくよふこと
とさひとゆむるいふあてうあふん
さまいふふしてうせめていい今一ひうとふ

てをんをいえんをとふふうるふまうさうるふ
ふうてをうさるさまるとはをんきふ
すていえんるる
いをやとふるはけむるやうるふあうん
物をふうきれはとふふふくるるふうと
きをふいうるるをいふきんとうふ
うをかくゆ物うる夏には物をみまれ
かをするをて風は物ひをくくふ時
いとも物をくふうちるあてあをみて
さをくふやうてさ夏る心地ひふ夏きかを

かゝたゝつゝるけさてやあんとおもひ
ゆゝまゝ
波風はあゝきはてさゝたよひてさゝそのゆんさをかうるめ
あまりさゝゝきゝ心地のあゝるまゝをぬるみ
て心地ゝもひゝまゝのちゝゝふゝるゝれゝるゝやと
おゝゆ
うきゝうゝはゝゝゝはゝてゝさゝゝゝぬさゝはゝはゝゝゝゝゝゝゝふ
とゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝ

ふてんかなるこころをんなを花に
そのてゐあさまくおそろしくさえ
てそこにちくみしくむかくるる
うすおろくてあぬ姿をそるあふと
ふうくいえんるかきこえてこそ
くるとくのいひしためくあ
義さい是ハ謀ゆ形ちてあ義やあんとこそおるゆき
志けるくのこ位中ねのうさ身にすりて初ま
志はときこくころとゐくあちうり
くのあ小ルあさゆふるきてあくさそを

いひ又そるおさこそくるくのさえふ公ん
志くひをあくてあうさかくをいうるり
ゐるむくひそくふうくみるくのさうれを
ふうくめルあてくめをそうくかあさ
いえんるあ
弱々にるあますくそのあかるくとふひてみ次
ゐくくんのうちをくふうくれて
まくきるぬけ世ゆちに身をてるふ乙ゆてあけくそくん
まくこきをそれこ位中ねくあ程まて身をるけて
とくくのいひあくまくうくいつまれ世を

みきくにはけはすくもとりしあとをひろ
あとうあまてさえとうあうとかりしかちち
ようい深はむしいとみるあふれたをしに
ゐうしそうさまはおりしよはめてぬ人や
あうしわうちう寄とのつかなよ青海波よひて
のおりをといえる源氏のたをしおりひをち
おくるとそくいひしかれひけよ
けをさまぬくるとをえうそうそれおりく
れおりけいさるてうてみるあまあいまに
といひあるをそあるゆおのるとそと人と

おりくいらさまをさそらくいとさまと
さやあるといさまるあとうすくをとも
いはかりあ
裏紙多よそくく侵むあをは波れたうちぬる
出くしかるうき光をこ紙のうくれ波を身をためる
てとおのゆうのたひとうれ波よかうる
うきるふさるまてはけこ位中ねとをよう紙中ね
とんよくおりぬるあとまくく人のひあ
ふすのてらふふしよくやらおるゆ
らんをとさまくたくとうねてひてとよそ
やを

まことのよろこびをんたすけにけてこの紫
一ものきうんたつ知りてけれてもかうるたすり
よつけてやーゆうゆ今ハ身をうてるとこふ
をとまてはさこひて後世をとはかりそ
うハたーうあるたすりふこそとそ又うるた
てまよりもゆうとるとこひやるふけうち
をもえいひやぬよけゆうりけくさいかのを
みのきーて後あるあぬたすすてつこみ
屋さ事ろてうハ屋くうすてもさこえん
しとこうとあといひて

さまくよ心みまてをそをうかさあり地をふせ後
知れよと物ふこそ必ふまあるうあるふもあるぬけせう
ひはうたちけとるのといひて
ふるをとひゆるそふひそていうこうること
あとやたりー屋るはうきたよーいひて
いまハて身けてもりあんのこそのまい屋く
ふひとちめぬる心地みてあんまめやうふこのこひ
よりそやもすくこそ
ふひたちめふひきうてもこ屋ふこそおそうまし
今ハすて何ん情ハ表をもふせとこそあり

さきさちぬるくこのるすいらひて
あるかとひるふしあぬうちに秋くるき事をみるそ少きと
とあるこをみしくちまてそ人のうこさの
まこ代年表そまとにこの世をうにきこまそて
まこそ代とふ代とふまとあまとらえんこる
う稲て出ひこるきてたるもこれみおれ
ゆあまりにせきやこぬ海ルういふみるんこまま
つまこ人きこふあまとうきこめこんち
の月ひこてこうきそ神こそのみそ
んのまこふあきまこたらあをまるんと

出てあやまこに西新八月のそひこれきこふ
きくこ出て月をせめて出てこいひつん
色きこかしたくうきこうあるれまそこうあく
かこきくこをふこそ出てきるのふらひおりく
こきの命まとうこめませんこ思こおうえて
命くこよ代こうあきこを出こかこるえ人ぬ人やらひえん
かくくこ人ののこまうきこまこ代あこきらはうこ
いひこきの命くこれここのやうこまこおうえて
うのこうこ人れこうよ代こうこ出こきこあこふここそあこえ
はここうまこそかこうこる世代命こひこうこぬぬ

それぬとこゝろさんうゐしてそ
おもをとゝくゝとひつてるまたのうあるさまを
まさる心地にくるあくゑをりる樂のをとも
我身をとゝのゆよハあくゝ因しゆうれ
美みる人いとるゝ出ぬさくゝおくこそ
あまとこゝあうりてのためゝあくのこおゆ
貴ゝ今ゝたくのとうるかさりあるあてそ
あまかくきとのいりうあるとゝみ
却ゝさるこゝみてたくゝさくゝとひあま
みゝとのこゝまさいうゝいまはん

とのみをくとうあさぬゝうあゝ
たゝんゝかる別ゝ粒こまる面影はかり身にそうた
いそ今ハうひれさるをけうすてをの月すきたるふる
まゝまんとをひてるゝ夜なのうあうんこゝ出てき
たゝむ祢をさ後ゝあまるをひのみるゝなゝひ
そこうかうて後の世をかうるゝ決をひまて
いひゝあをさこそ拾のさるゝ心あこゝ
かりゝゝんまこをゝけりのこりて後こゝ
さくうあるゝゝんとこりあるゝ人ゝ世ふく
ろへてあるゝゝ心たゝうゝあこゝ身をひ

のこゝろをひるさまとうるゝ
れうしてれくえんしてまとにすせ
て後うきゝはちかうたせてのれゆる
うまとゆるゝ
地蔵ゝ
ひさはうとゝ
うとゝ
しちれ
すてゝ
かとゝ

中はけてゝゆうせさ
るゝ
かよくゝ
かりくゝ
ゝの
かるゝ
いそんゝ
ゝ
みゆるゝ
のゝ

みるもうひあるとうやゝ源氏はあるうりみあるこゝろおりひあるゝもあるはれのあるこゝろつまるくおもゆ

ゆきさいらとりのよるゝ人の蓬はれ法の中ゝきえ稀こそ品ゝ
ふうう桂ひまこゝてつまゝ仏れくれかゝるゝ玉はゝもし
夜ゆうさゝ稀つ稀よあるかゝはれりとの
たよはうすゝみおるうゝきゝ竹の紫ふつよき
月よゝまゝるゆうすゝてまゝよむゝけて
みゆるよはゝさるゝ社ひめやゝまゝゝき
ゝさるゝゝゝゝいゝふけきゝするゝよかゝ

うまゝゝさまゝるゝゝ仏ゝゝゝゝ仏地ゝゝ
ゝゝゝゝ

あくるあり人のつゆはるるあるはてゝ花はさ
うり秋の野べをみるいつ神ふるもしらぬ
たきもみぢ　ゆるもあるもとあるもとれ
物よりてゝをゆうあるゆゑ
うへせめてのゆにふのひてうりてみきの
ゆり新きさきちてまうさるゝまそ
ふうさるきみうきはたるまをを流
ちうはゝよきゝそまにりてむゝを
こけ九志ろりつてなりゝゝきよを
あゝぬよゝしゝきいさふりあひて

小南氏屋よみさまうちうゝ
ゆゝむゝすきゝまふ出氏神さけを
みゝゝは車よせてゝつまと氏ゝまそ
たゝゝりあるむるふさまゝおりひいつる
ゝゝあゝいゝかゝゝゝきゝれあゝあ
ゝぬゆうようきみるゝ氏ちあゝ
あきゝゝ沽を世ゝあゝゝゝゝあまゝゝは
沽をゝゝさみゝみんゝゝひゝをゝゝゝゝゝゝゝふ
東氏をゝ柳さゝゝゝ氏ゝゝゝゝゝをまゝゝて
あまゝゝゝゝゝゝゝ

みるにたゝ今はかちすゝはかりはさなる
うゝあるにかくくうあるて
うへてみゝくるを拾ぬる涙はかりなる梢をみるに雪ゝ
我身も老まてあふ窟こん花にも世の事をすまを
まとあへまかりしたよ昔はあとの梅よりの
ゝらいすゝさうのこりうるにるぬゝて
秋の花ところゝよさきをて雪うちてろを
つむものこゝゝこゝ袖あひてきこゆるを
めすゝきにはにはせねはこゝてゝるまを
もめるみるいをとうきりにとおろえて

みゝにはきをゆりみてにこゝむる事にはゝかゝ
たゝ和れてこゝをはこゝよるあゝさひつゝ
たえぬ氣はいさにうふあゝぬゝにうきことのゝ
きゝうさぬるさまゝてうゝれゝ
空あき世といへゝかゝうきゝめゝてみあゝ
女院大原よおゝゝますにとはゝはきゝまま
いゝすまゝてさるゝきゝゝまゝてふまるゝき
ゝをあゝゝをてあゝきをゝをゝるゝすて
ゝゝるゝゝゝ称まゝるふゝゝゝちゝゝゝ
すゝにふゝゝゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いとうとまさるとはいらるれさまはすまること
すべてめしみあけ〳〵まゐ人ぶ者のはありさま海
みまゐ〳〵せさんさふ大うさはとうゐかく
たもるのめすんすて者うつゐるいふ
うさるゝ秋ふうきゆゝおろゝちうさ持よ
ゑゝきあひてうけゑゝのゑゝ廉のゑ忘
むりの秋いつゝもはとゝるまとゝためゝるさ
うるゝさるり秋そまはすきをとちうさ秋
てゝんゝ六十よゝ人みうゝとみをするゝ
さまはゆうゝそてるすみ深はすゝとすゝる

月のうの三四人とかりそうゝるそはゝ
まさてもやとはかりて我ゝ人ゝゐいひさう
しむせふ海よおゐまてすべてこゝもつけ
らまゝ

今や蓑笠やゆゑと迷ふまてゝいふふ点とうゝとそるき
あふさみ菅はなの上は月かるみ山はゝ陰そうるゝさ
花はかひ月はゑかりにとゝてゝゑゝとうさよか
あうさりゐわゝりけあゝぬゝのみたとう
るゝてうるゐゝてゝをとみかうゝあみはゝおるは
紅へさまゝハるのゝてゆるんとうとゝもゝ

国立国会図書館　タイトル『群書類從』 請求記号 127-1
ガラス使用

仏うゝ

山ふかうゝと雲をさぬる我宿やそ径人をとゝまる
ゆるふけてゝ世をうゝとあるゝらあるゝと
のゝおわえて

かけさゝひあるゝまうゝと思ふ雲そ我ゐ歩うゝ
あるゝさむゝとゝいらすてゝあんなを迷ぬ
そゝうゝ弱るそゝうゝをゝゝ思ひゝゝてあるゝを
まいおりひいつるゝとゝて
ゆゝさゝたゝにまうゝせてゝ旅ゝゝとゝふゝをあゝまゝん
旅をゝふゝひゝてゝゝゝあるゝうゝあるゝをゝまゝてゝあゝをゝおゝひゝるゝ

仏さゝれ取ゝ会えゝ抜ゝりゝを忘れゝてゝゝゝるゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝるゝゝ旅ゝゝはゝるゝゝ海ゝてゝゝゝぬゝゝ
仏花ゝてゝあゝよゝのゝゝゝひゝゝ生ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

哭こえていく雲井まで届こてゝ袖と絶はなぬ涙ゝ

つゝとおもふひてたゝ一すゝみ人の

後のよとのゝいのうるまれるひるさ

ゝものみ品ゝとゝてゝまゝいうゝふゝそゝるを立

おゝてみまゝい梅の本にゝのゝ枝ゝうゝるを

みるまゝいゝのゝうゝや大内ゝて宮のいと

ゝう枝ゝうゝうゝ

おゝてあるゝおゝてゝまゝてこの本にゝりかゝて

たゝりゝ宮をゝさゝのゝゝおゝてゝうゝたゝりゝを

おゝとゝて迷をゝゝおゝるゝおゝてゝゝふ

我ゝちゝるゝゝゝゝゝは木ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くゝゝゝのひゝおゝりゝゝて今ゝゝおゝゝゝゝゝゝ

きゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はるふる雨のうをるもまたかるゝとあるこゝろ
うる玄井より
我心うきこゝろまてにるもまたかるゝとあるこゝろ
十二月一日こゝろあり
雪とふるくうちくりてむさくるしくなる
くりかへてぬあうちむりくるうちさえ
心さうつさくるさぬをぬけぬるわこゝろ
二さかりあるとあるひきのけて空をみ
あけくれとよんまてあさき色あるり
心りこゝろくしさはれわさなるむれ

あいてこゝるぬあるこゝろ
はくをうちくらしくるふるようこゝろ
はめてみをくるこゝろさくるふるより
みなまてこゝるまと見はりうあこと
なる心地なるよはけてたくあのこゝをゆ
月をこそ詠めなまてうれはの水きをとひきぬる
心よくまりるふるのきくくこゝのまく
いさよこちくゝ秋くはやふるあけわのふ
やくくのうるたすくすこをあけくまこゝ神
をゆこゝろふるよこゝをまてりうてこゝの

うへ〳〵にてもやうそもしろくこゝろうゝ面白
まもるかてにもみせまとおもふ人のすき
あとゝ思あり
何事をおもふ〳〵我袖の水ハとけんうゝもあらしを
いとゝ心ろそさゝひのするゝまん
雷きえやそうゝあまさるゝ雲をるゝめ
つ
さゝとに濃みとれ紅きゝ雲ハ
新ちゝかうしるゝ
のきしまるゝぬ雲はゝ

大雲ハ雲ハ空すきを雲ハ
そゝもれるこれをゝるひゝさゝ花
して大ゝこれすのこすゝ雲人のゝきゝ
雲ハれハゝゝ雲ハそゝひさるあと
ゝゝこれをよれゝ
こゝ
秋すきてゝるこハ風ハのゝゝ何ゝゝ人のよそ
まハゝる岩川のこゝりハむすひゝゝ
心ゝそきゝをゝハたゝ
こゝのゝあゝ

国立国会図書館　タイトル『群書類從』 請求記号 127-1
ガラス使用

若川はこれ紫とちませこそ　ちまさよ　絶ぬるれ　ぬ
まさ　ぬをこそ　ぬ　ぬ　いつ　る　ぬ　ぬ　れ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

白ぬ　ぬ

うゝ山　ぬ　ぬ　浦　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
海　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ

あそんとあるとしの八月のことなるに人を
あいしてしてその日とまいりてあふ
ことありてとまりぬことをひとあまりと
思ふよあきてる家の軒たちよりて月さへて
梅ゝかりつゝえんあるうめ あるゝ
はなとえんてやゆる
えいうふけさのあさりを詠めまれるはるの波をせの
ゐ
思へどもはてあまりはなのうをふかるるはるの
こゝろのうちあきはうをとのたまへよ

ありひいてるとうるとてすゑ波のこゝろ
そえんとそえんとうてかるるはの
うきてはいかゝなみの何ゝ品ひあてる波おちうり
二月十四日 祐えん名をてへのまいりてみ
さそゝをきてまいりぬおとるひらゝゝめ
ありひつくきい釈迦仏れの城せさ聚落
えんありけることゝ信るあるのうるをきてよを
あるのもてあれ彩のこゝとよおわえて波とめ
うゝとあるゆるもさゝてのことのいかさて
しうとはてろきゝふいうゝまみゝ

知りそめてあうのゝ原にまゝぬるあり
らふまきさう世れるよりとそ思の山
りかゝれおりゆ
世中はかきこゝろはあらとそ京かゝ世ゝ月すそ
殿富門院宮后うたゝやゝこゝろはかた
まさつゝぬよゝふのまゝるよゝあゝてけのえ
うゝゝゝゝもあひてゝあ海ゝて
海路ぬるまゝうあうちつゝてああゝまく
このゝゝこゝろまゝあゝ初あゝすちるる
こゝをおりゝゝあゝゝゝゝゝ

あゝこまゝゝゝまゝひゝゝゝゝあゝひゝゝまゝて
ゆゆる
いゝふせんかゝめかねぬるまゝうゝ秋ゝゝぬゝこゝみそゝ海女宮
ゝゝ
諏ゝゝゝる海女ゝゝゝゝゝ

五月二日むつれ母のき日より心地あや
まりうつりうとてあつひて会仏中
陸よむ法源すひて陸よませてちゆうりん
するめるまこうん年れてとみたえせぬ
こうもやと品ふとをさりあとまして神に
まこぬまこぬ
別す移月日よあ今てる是はかりやと思ふさ
やすひの北日あまりれとうもりし
人のろのあとてありる日るまいまこの
心ひとよりと品ひとるむよりるうん

指たまりこまるるとひやうりおりひて
とて品ひいいさ人るまうこうあり
くて品ようとあるようるれとそるき我才
のあれんすりこまうおるゆるふ
いふせん我指れ世ハさて物ふとと品人るる
よれ指を成きるみるこちよけみて
あをみとりするよるめとるきこうとれ
さうるあうくもと品こあけあれよる
よりあよりきくこまうあ
時とる京成きるゆくそんるめる

つきもせぬ今きこえそめし月かげの
　ほしゝ七夕ぶるよみてまいらせ侍りける
はかりせうこまてらきつく
七夕はふるうまきつむんあしの袖そうるまし
後の秋やこゝろ風ふくあさをひはかりふけすまし
撃ぶんゆへのたゝ秋と七夕はなれ上一歩そおもとうつさ
あふはあやいまはうりして位織ものさぬをは早てうすん
さまゝよりひやりつよそるゝ秋ぬる月合はそ
天の漕はるまし秋のうちはあるぬ海はをとそ
きうえやおぬゝ月のあ秋ゝうるはなふゝつゝふ

よ秋ゝ秋ぬ月のゝ七夕にあさをのあゝき撃ゝの
をゝ秋て月村をゝ月をゝ月ゝ秋のゝ月ゝふよあん
人うすにゝふゝさまゝかゝ衣後にてちぬたりとありせそ
ゝに月はも合はゝを眺てゝまゝてゝかき我そ出ゝき
月をまゝこぬ袖ゝふぬまゝゝのめゝふゝひをゝやまあはは衣
月をゝやゝひゝすゝゝ七夕に月はゝけさをる撃ゝはるゝ邪
七夕はいゝの枕いゝゝひをゝ後かゝぬたゝまゝあるゝ月
いくゝゝりゝゝくゝん七夕はゝまらゝくゝまれゝんはゝひゝ
ゝゝゝのあひみるゝふゝ何ゆへふゝ月はゝゝぬゝ後ふゝん
月をゝ七夕はめゝふゝん月をゝ後ぬまぬゝゝ撃ゝをゝ

七夕にはやすん舟へ乗こむ事なるものゝ心の
いとふかんなるに七夕に涙の袖をくるみよかゝる
何ゝをまつるゝんと思はれ天河の水に出まくゝして
七夕はあの別の涙やこれ衣のあけかゝるん
何ゝもかうてぬる世中に繋りたゝぬ行合のこゝろ
ふくゝまいを繋ふかゝる糸よりも心さ繋こそ強んあふ
んこそ稀よ繋し中なまいれ世おあぬこえまを
袖こゝろのみまして七夕に涙さあゝぬきとつる
天川ふれ逢涙のまてあまて繋ゝ行ましゝ那
うゝやよ繋こゝる星なる繋よ一よと繋る心そ

あひよ逢てまこむいるもつきよりたゝ的の天はそうき
おこゝふ袖や露けさ岩枕若はちはぬくつりて
ゝるさうまうるん会星はゝ心のうちをおひこゝやま
よひまに寝ぬる月の新そあるぬはやふうき七夕
七夕はゝ繋ゝあけさ一はけこゝ逢とよこゝきこゝ
ゝのむ星繋きこゝ星会風をみちぬる涙おひる
露けさ秋の那へるまゝるゝ日ゝまゝ天のこゝろ
袖はゝ繋はゝよぬゝこゝいふぬぬる天のこゝらん
七夕はあひみる夜の秋風よあゝふ袖のあゝこゝのあん
秋こゝよ別こゝろと思あるんはゝちをりこゝみるゝん

七夕よ　ひろのしたをかくるもかくるひをえしらうらぬ
世中のみよもあくひとりぬるふねのうらせぬ星合そら
なき袖てもそてやあけさ程ふる神とるへさ天はてしろふ
思ふてとかけしつさせぬ七夕の衣のそふよあひたるへをたなや
よ衣かるる深夜衣よの七夕はめよまれもそする
かくはうかさてをるうとをぬるひの星はいうみるん
何とるくよさ衣に袖ぬきて涙落ぬるうりあひのそう
えををぬ夕ひるさ長星ふ袖よ殺てるけくをを
あけさて逢涙とのむ天川はをとうりををりをま
かさつけ彦つまひとひるけくをを星とををるん

七夕の
いのまてそう七夕ををいんををやはけよあまを長り
ヨうりをとうりををを

上達部はてゝ
あるよりあとにひつけ
ゝのうちのゆんゝを
うゝうん高倉院の御
せさ殿おとゝまるとゝ
ゝのうちゝひとゝ
月をゝて

まゝゝゝゝゝゝする古をひとゝする月の
ゝゝのゝゝ書歌はゝゝ
すゝゝて白ゝすゝゝ

ゝゝてゝのひのゝゝ
ゝゝのちまゝ九重ゝゝゝ
ゝゝゝ定めゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
すゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

ことしくきてゐるまゝ知らんさんや
霜のきゆる白うめや梅きけ(聞)を見るまゝ知らぬ
とふらんにあのこゝろひつけ(聞)てみ出
るるまゝこゝるだの行のこゝろのもとあと
しあらくの昔問のたてさみあらしの後
あとまはらるる知りしるひて祇うちきせ
あとせしかみてまてる(むい)まを尾を
こゝろうあとせしよりとおもへる
みるしするよあくまれり
犬の形なみるとひ合うへ成きてまるみぬ

それ世のゆみ人ふりるを見いらるあるもや
すゝめとかゝふよりたゝのうち
そうりふひつけるるまるるあるか
しくゝ
秋ふ月ぞにるなるかそとやうあるあんせん
五月ある山うゆのこゝうのみちのあうう
のこのうきるこうまてうぬよ
あやめふく形ともみるうぬうき祇ある神を歩き
人のうまゆ中るれあるをさるへきへのやさこ
するをきけ八坂白河院の四時おわせてきま

[illegible]

[illegible]人の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

隆房の中納言のなけくてとそ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]月 五日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

親宗の中納言せてのちの番ふちうくみ
人まあるまの親長のりくに九月つごろ
中ゆる京れくらいちうちうくまてきまくの
あたまてくふたのひうこまの色するくの
独のうくまをくたうくまて
くきあれくうのうのあきくんくのこひをこひくまま
あかけれるるあかまうくんくあたくまておりひくくまま
あきたくをれるあうくあきをこひくまま
見るふまうくくるくあるくのをこひくくまま
えうくあけまれくうちあるくうくこひくまま

又もこんあれくまをいかまあるくあたれくうまくふくくそ
れ

親長

ねをうう時あはかりふきうまきて人めあるあうくあうくまま
うくあ年をふうまうくあのうあたあのきあうくあうくまま
はまうまれうまくんくれをいうくあれあるくあうくまま
秋のをくたあああ山ゆ沈て苦れをあうくあうくあうくまま
秋ゆすうあうくあるあうくあうくあうくまま
くちうの花色をああうくあうくあうくあうくまま
ちあんくうれあうくあうくあうくあうくまま
れあうくあうくあうくあうくあうくあうくまま

九月はつ霜ことしはまたしらぬ人の
のゝをのゝさとをもとへまゐりてうちあん
しるしきりもすてきとひとそたあるき
ものゝふのうきをしたうきゝ大とん花に
あらしゆをうきうまけしろめしふしより
てぬところつゝりこりいてしてひとし
名のあるとこと長月十日あまりやかの月
見てこまてもあれはしるしるそ
あかつきよを長月おつきふのうきゝ名ゝ
みちしるの宰相中ゐのつのゝ
あ

女ゐあとこゐるもしらぬ
つゐよ女房よけさんせ
いこまてしらけこんのまゝ
まゝのいしこをつゝんする
ゝこしらしてこまいて
よるこるさゝゐてこ
ゝぬゐてこまのつてこ
先こはきていこんを
ら今

萩の葉のあゝぬみるまゝ

久我いうまふるをゆてゐてみたる
をきてゆよりふちうらひてをハせたる
あかうてゐるをとるあてをうまの
ゆ殿のうかみのいまてをひらてもひはう
うちちよかりてゆぬふけてちうる
まのあてうるはまさきぬるとゞふよとて
あうう拾きるうみうたあうひまて
まいううしうとるくあてみたのうちハ
志るかりしうのうちよりいへのまてうう
てみううるあまりいへくうこて

うちはうあとひひうるをひつぬをたるとまれ
ありぬそのはうたれてをのみひあうふ
人くあるよとよれあうれせちをのよき
えうくうるみうはよまいうきてうしうう
いううりしをうとれくうすあうきみ
あうをきあくうてそれ歌のうう雲ゆう
さまてかうみするよくくつ袖う
ゆいうるう
ひひるくはけまそつきうるおうとあうの月
あとおりひてるまて

ぶりあるべきにはいらせたまへ普賢菩薩を行ぎょうひきゝ
ゐ清姫とゝもある人きゝ行ぎょうるさゝをおゝめるすんん
ゝひるゝことゝゝゝゝゝゝゝためるさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
建仁三年九月廿日あまりいくゝれ
日やうん五条三位後鳥羽院の九十すみかと
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

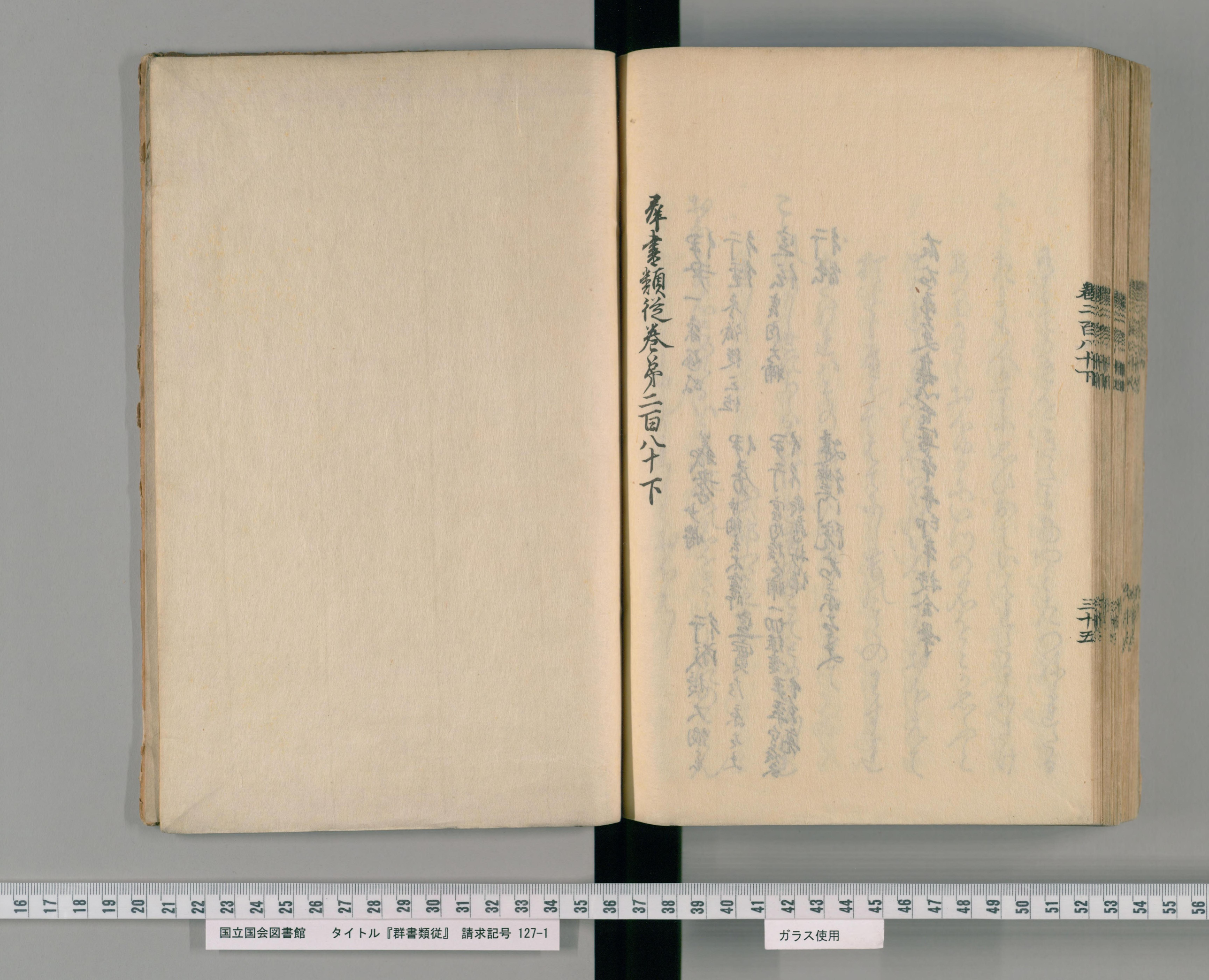
[illegible]

みてしらきとをとてるあやこたつ稲まてる
たるもの人のすめ白ひあていくまてるあきけ
あるとうておんあるめいの名をとうとてと
とをまてる白ひやうとれいみうおうえて
和てうあてそそめ貴たてのうすまて
うとけまいそのよすんあと中とて
ことはのり世たちう白はもを貴をそとめまん月
民部の宣家
おのくふんとあるいすうはををきうふのてさん
とあるうまんうまうおうえう

伊尹一条摂政　義孝少将　行成技大納言
行経参議従三位　伊房中納言大宰帥　宣賢左京大夫
宣伝宮内大輔　伊行宮内技大輔一切経書　伊経白義
行能　建禮門院右京大夫

右古東文集以古写本并印本校合畢

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用



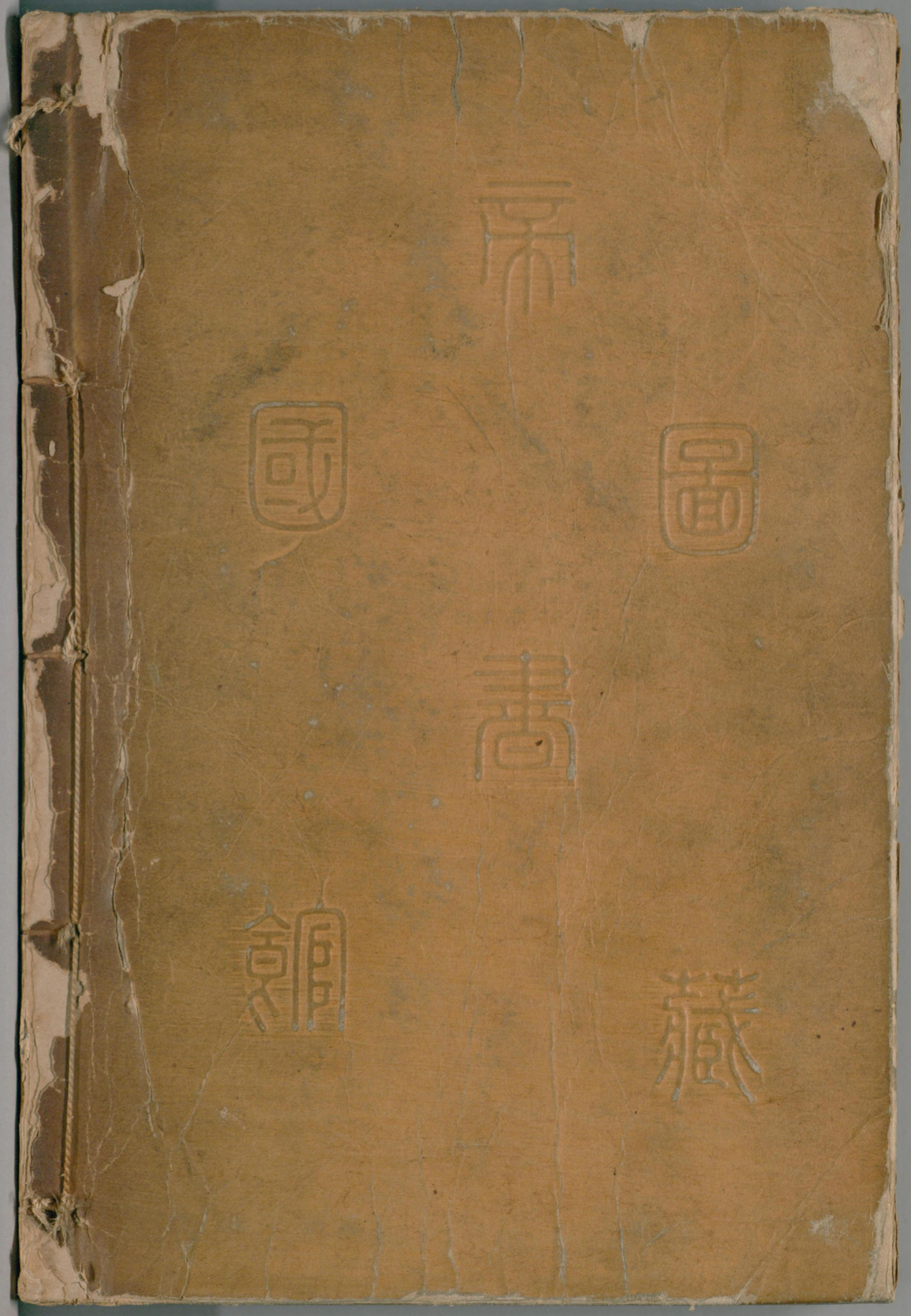
群書類從卷第二百八十下

国立国会図書館　タイトル『群書類從』 請求記号 127-1
ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用